

国民結束の日 (NUD)

	種目	参加人数	参加チーム	参加チーム
第1回大会 2016年 1月16日～1月23日	サッカー(男子)	約 350 人	8 チーム	全国 9 地域 (全12域中)
	陸上競技(男子・女子) ●公式:100m、200m、400m、 800m、1500m、400mリレー ●非公式:砲丸投、円盤投、やり投、 女子3000m、男子5000m		9 チーム	
第2回大会 2017年 1月28日～2月5日	サッカー(男子)	250 人	12 チーム	全国 12 地域の 中核都市
	陸上競技(男子・女子) ●公式:100m、200m、400m、800m、 1500m、400mリレー、1600mリレー、 砲丸投、円盤投、やり投、幅跳	240 人	12 チーム	
第3回大会 2018年 1月27日～2月4日	サッカー(男子)	310 人	8 チーム	全国 12 地域の 全域
	陸上競技(男子・女子) ●公式:100m、200m、400m、800m、1500m、 男子3000m、400mリレー、1600mリレー		8 チーム	
	バレーボール(女子)		5 チーム	

われて紛争の最前線に送り込まれ、他民族を攻撃するという現状が紛争を複雑化させているのです」

国内の治安が大きく悪化した13年以降、南スーダンでは約200万人が難民として国外に逃れている。すべての民族が南スーダン国民として結束することが大きな課題となるなか、南スーダン文化・青年・スポーツ省(以下、スポーツ省)は、出身地域や民族の異なる若者の交流を促すことを目的にした全国スポーツ大会を開催するアイデアをJICAに相談。

JICAは、「スポーツを通じた平和促進」活動の一環として、「国民結束の日(National Unity Day)」(以



第3回NUDのサッカー競技に使用するグラウンドを整備する国連PKOバンダラデシュ部隊。第1回は日本の自衛隊と企業が整備を支援した



スポーツで
南スーダンに
平和を!

南スーダン「スポーツを通じた平和促進」

異なる地域の若者たちが、国民結束の日にスポーツで交流!

独立後も紛争が続く南スーダンで、2016年から年に1回、「国民結束の日(National Unity Day)」(全国スポーツ大会)が開催されている。参加した選手や観客はみな、平和実現への願いを胸に膨らませている。

文●松井健太郎



独立後の南スーダンの紛争の背景にあるもの

2011年7月、半世紀以上にわたって紛争がくり返されてきたスーダンから独立した南スーダン。念願の独立を果たしたものの、2年後の13年に、ディンカ族出身のサルバ・キール大統領とヌエル族出身のリアク・マシヤール元副大統領の対立を背景に紛争が勃発。15年4月に「衝突解決合意」が締結され、暫定政府が設立されて以降も、国内各地で政府軍と反政府軍間の武力衝突が起こり、南スーダンの平和への道のりはまたもや遠いものになってしまっている。

「紛争がくり返される要因の一つに、ディンカ族やヌエル族という主要な民族が遊牧民であることが挙げられます」と話すのは、16年9月までJICA南スーダン事務所長を務めた古川光明さんだ。

「紛争下、人の移動と交流は制限され、他地域の情報にふれる機会が少なくなるなか、民族間の不信感や憎悪が増長してきました。遊牧民にとって重要な資産は牛で、結婚のときは花嫁の家に牛が贈られるくらい牛は大切なものです。もともと現地社会には他民族から牛を強奪する文化がありますが、内戦や紛争を長く繰り返すなかで銃が普及し民族間の犠牲者も拡大しました。銃を持った若者たちは安い報酬で政府軍や反政府軍に雇

共同の宿泊所で生まれた、異なる部族の選手間交流

南スーダンは慢性的な紛争状態にあり、財政上、スポーツ大会に投じることのできる予算は乏しい。全国規模のスポーツ大会を企画・運営した経験を持つ者もなく、インフラも整っていなかった。

「公務員の給与が支払われないこともめずらしくありませんから、NUDの準備会合を首都・ジュバ市で開くために各地域に呼びかけても、担当職員らにポイントされることもありました」

そんな困難を乗り越えながら準備会合は開かれ、競技種目や選手の対象年齢など大会のルールがつくられていった。企画を進めるプロセスを通じて、「自分たちが開催するスポーツ大会」という当事者意識がスポーツ省の職員や大会関係者に高まり、侃々諤々かんかたつたの議論を経て大会の骨子が定まっていた。そして16年1月、全国9地域から約350人の選手が参加し、初めてのNUDが首都のジュバ市で開催された。国立競技場で行われた開会式を、古川さんは感慨深げに思い返す。

「南スーダンの国旗を手にした選手たちが入場した際には、感動のあまり涙する関係者もありました。NUDは南スーダンにとって悲願だったのです」

当時、現地に派遣されていた自



JICA 安全管理部部長
古川光明さん

「南スーダン事務所所長として、第1回NUDの開催時に準備段階から携わりました。1955年から今に至るスーダンの内戦や、南スーダン独立後の紛争の歴史を乗り越え、国民が一つになることを目的に開催されたNUD。スポーツ省の行政官の努力や、平和な場でスポーツを楽しもうと全国から集まった若者たちが交流を深める様子、そして、JICA関係者が一丸となってそれに貢献できたことに感動しました」

JICAアフリカ部
アフリカ第一課調査役
山中祥史さん

第3回 NUDの開催を担当。「約1週間の大会を通じて地域ごとに色分けされたユニフォームが入り交じる——これこそが平和の基礎となる結束・融和を表していると思います。第4回 NUDの開催も目指しています」

これからもうすぐと開催したい！



10日間、寝食をともにしたことで選手間の交流が生まれ、たがいの理解を深めた



第3回 NUDの終了後、3月にウガンダでふり返りの協議を行った。NUDは、南スーダンのスポーツ省次官、局長、プロジェクトチームをはじめ、JICA専門家として開催に協力したJIN（埼玉県）の大野康雄さん（後列左から2人目）、内田順子さん（手前中央）、石川渚さん（後列左）、JICA南スーダン事務所の服部麻里子さん（前列左）ら多くの人の尽力によって開催された。良いチームワークがあったからこそ、大会を成功に導くことができた。

HIV、ジェンダー、平和構築の啓発などをテーマにした、選手向けのワークショップも開催された



陸上競技。地域の誇りを持って真剣に競い合った



女性選手にも活躍の場を提供したいと、第3回から始まった女子バレーボール。ボールとネットは日本バレーボール協会からの寄贈だ



サッカー選手たちの健闘とフェアプレーに声援を送る観客たち。「NUDを通じて、私たちが同じ国民であることに気づいた」との声も聞かれた

あ、ジョイントだ！
あ、惜しい！

様の方法で開催され、310人の選手が参加。各地域の選手がジュバ市に安全に來られるよう、移動には飛行機が用いられた。渡航費が払えずに参加をあきらめかけていた選手もいたが、スイス政府が陸上競技と女子バレーボール選手の航空運賃を負担。また、第2回大会で優勝したレイク地域のサッカーチームは、JICA職員がラジオ放送でそのニュースを発信したことで市民から寄付がよせられて参加することができた。共感と支援の輪は一般市民にも広がった。

第3回大会の終了後、「NUDを通じて他地域の選手と友達になったか？」と参加選手にアンケートをとると、9割以上が「なった」と回答。聞き取り調査でも、「部族や出身地に関係なくたがいを尊敬し合うとき、平和、結束、そして愛情が生まれることに気づいた」「ほかの地域の選手と携帯番号やフェイスブックのアドレスを交換した」という声が聞かれた。

反政府軍の拠点があるユニティ地域のペンティウ市のサッカーチームには、安全と経済的理由からジュバ市の国連保護下にある避難民居住区（POC）に暮らす選手も参加していた。避難民としてピッチに立ち、観客から大きな声援を受けた。試合でも活躍したその選手は、大会を機にジュバ市の

衛隊と、橋や給水施設の建設を行っていた建設技研インターナショナル（東京都）、大日本土木（岐阜県）が整備したグラウンドでは、異なる民族の選手たちによる白熱したサッカー競技がくり広げられた。くしくも決勝の対戦は、ディンカ族中心のワウ市とヌエル族中心のペンティウ市のチーム。諍いが心配されたが、選手も観客もフェアプレーを貫き、ペンティウ市のチームが勝利した。負けてグラウンドに泣き崩れる相手選手の肩を抱き、たがいに健闘を称え合う姿に観客からも惜しめない歓声が送られた。

大会期間中、選手間の争いもなく、スポーツマンシップが貫かれたのはなぜかと尋ねると、「1週間ほど同じ宿舎に寝泊まりしたからでは」と、古川さんは一つの答えを示す。

「JICAがかつて建設を支援した教員学校の宿舎を選手の共同宿泊所として活用し、異なる地域の選手が入り交じる形で部屋割りを設定しました。それによって、『ジュバに行けば殺される』とも言われていた当時の物騒な状況のなか、勇気を出して参加した選手たちの間に交流が生まれたのです。異なる部族の若者に対して、『話してみたら意外といいやつだった』と印象が変わった。こうした交流の機会がなかったことが部族

間の猜疑心を増長させ、牛の強奪や紛争につながっていたことに、彼らは気づいたのではないでしょうか」

優勝カップは、南スーダン人全員のもの

第2回 NUDは17年11月2日に、全12地域から約500人の選手が参加した。ただ、16年7月に発生した政府軍と反政府軍の大規模な衝突の影響で、JICA南スーダン事務所所員らは隣国・ウガンダに拠点を移していたため、現地で協力することはできず、準備の協議は電話やメールを使って遠隔で行われた。

「それが逆に奏功したとも考えられます」と話すのは、JICAアフリカ部の山中祥史さんだ。

「NUDを継続させるには、企画・運営を現地の方々が自主的に行うことが重要。私たちの協力が最低限の範囲に収まったことで、より主体的に実施されました」

スポーツ省の行政官たちも、第1回を成功させたことで自信をつけていた。競技の判定に異議があった場合の対応策を含め、公正なルールづくりとその遵守を徹底した。ルールを守れば平和は保たれることを、選手や観客に体で感じてもらいたかった。

衝突が続くなかで行われた第3回 NUDも、18年11月2日に同様の方法で開催され、310人の選手が参加。各地域の選手がジュバ市に安全に來られるよう、移動には飛行機が用いられた。渡航費が払えずに参加をあきらめかけていた選手もいたが、スイス政府が陸上競技と女子バレーボール選手の航空運賃を負担。また、第2回大会で優勝したレイク地域のサッカーチームは、JICA職員がラジオ放送でそのニュースを発信したことで市民から寄付がよせられて参加することができた。共感と支援の輪は一般市民にも広がった。

継続して行われてきたNUDの大きな成果として、「17年12月に、IGAD（東アフリカ地域7カ国が加盟する政府間開発機構）による調停の下で『敵対行為停止合意』が締結され、現在は和平プロセスの再活性化に向けた対話が行われています。そうした政治的状況と並行して、国づくりの主役となる若者が参加するNUDは、平和を伝えるための意義深く挑戦的なプロジェクトです。現地の若者たちが将来、『NUDに参加したから今の自分がある』と言ってくれるような未来を築きたいです」と山中さんは語る。

対立する部族でもわかり合うことができると感じ取った若者たちの経験や思いは、南スーダンに平和が訪れたとき、「二度と紛争はくり返したくない」という強い抑止力になりうるはずだ。サッカーの決勝戦を応援していたある観客は、「優勝カップは勝利チームのものではない。平和を求める南スーダン人全員のものだ」と語った。19年の第4回 NUDの開催に向けて、より大きな共感や協力が得られることを望んでやまない。